

# ヴィンケルマンと古代ギリシア精神の再生

—日本からのメッセージ—

岩 崎 允 胤

## 1

古い芸術の都ドレスデンは、ヴィンケルマンの名とともに、わたくしにはつねになつかしい。1754年から55年にかけての1年間余りを、ヴィンケルマンはローマへの旅立ちの期待にみちてこの都ですごし、『古代美術模倣論』の執筆に没頭した。そのことを想起して、わたくしは、ドレスデン工業大学の創立150周年祝典に招かれたさい、『ザクセン新聞』（1978年10月16日）に次のように書いた。「ドレスデンは、わたくしの青春の日以来、偉大なフマニスムスの伝統——たとえばヴィンケルマン——を育くんだ都市として、わたくしには忘れられない」。このことが、わたくしのヴィンケルマン学会に入るきっかけとなった。

第2次世界大戦のさなか、東京大学法学部の学生であったわたくしは、日本における西洋美術史の泰斗、児島喜久雄教授の特別連続講義『古代ギリシア美術史』を聴講する機会をもった。かれの口から、いくたびか、ヴィンケルマンへの敬愛の言葉が語られた。すでに美学者、井島勉教授のすぐれた著者『ヴィンケルマン』（1936年）も出版されており、やがて『模倣論』が、児島教授の弟子、沢柳大五郎氏によって、1943年に翻訳、上梓された。わたくしは早くもこのとき、ヴィンケルマンのこの著作の全貌を知ることができた。その「あとがき」のなかで、児島教授は、天皇制ファシズムの嵐にたいし、自由と文化を破壊する時代の趨勢への抗議を、当局のきびしい検閲をも配慮しながら次の言葉のなかに表現している。「このごろわが国においては精神科学、なかんずく欧州文化の研究を無用視する消極主義あるいは独善主義が非常に多くなってきた。己れを究めんとするものは他を識らざるべからず。われわれは軽佻浮薄なる曲学阿世の徒を無視して営々わが将来の文化の基礎的研究を積んでゆかねばならない。」

天皇制ファシズムの崩壊ののち、わたくしは東京大学文学部の哲学科に再入学し、古代ギリシア哲学の研究に没頭した。のちにその頃を回顧して次のように書いた。「古代ギリシア哲学の研究から始めることにきめたのは、ヨーロッパの思想と文化の淵源がギリシアにあることを、ヴィンケルマン、ゲーテ、シラー、ヘルダーリンが、哲学者ヘーゲルが、そしてロラン（作品『エンペドクレス』）がさし示してくれていたからでもある。こうして、わたくしの『哲学的生活』は、敗戦とともに始まった。」わたくしはやがてマルクス主義や哲学の研究にたずさわった。その後、K.マルクスの博士論文『デモクリトスとエピクロスとの自然哲学の差異』を、その詳細なノートとともに翻訳した。これはディーツ版マルクス・エンゲルス全集の日本語版におさめられている。

## 2

ヴィンケルマンがわれわれにいまも語りかけてくるのは、かれが、古典美の、自然以上のイデア的な美の、偉大な発見者、古代ギリシア美術史の比類ない先駆者であるとともに、ドイツ古典主義への道をひらいたすぐれたフマニストの一人であったからである。

わたくしはここで、日本のわれわれがドイツ古典主義の思想的本質を、とくにドイツ古典哲学の核心を、どのように理解しているかについて、簡単に述べておきたい。

ドイツ古典哲学の偉大さは、一言でいえば、人間的自由（歴史における）と弁証法の見地を白日のもとに提示したことにある、といえよう。あるいはまた、人間の尊厳に基礎をおいた理性（感性との統一における）とヒューマニズムの見地を、世界観と科学性との不可分な結合のなかでうちたてたことにある、ということができよう。そのさい、わたくしは、核戦争阻止、核兵器廃絶がわれわれの最も緊急な課題となっている今日、カントの恒久平和の思想と、ヘーゲルの、理念は実現されうるし、実現されねばならぬという思想のもつ、高い実践的な意義をとくに強調したい。

人間の尊厳に基礎をおく理性とヒューマニズム、いかえれば、人間的自由、フマニタスの思想は、ヴィンケルマン、レッシング、ヘルダー、ゲーテ、シラ

一らの作品のなかに貫かれており、またモーツァルトの『魔笛』、ベートーヴェンの『フィデリオ』や多くの交響曲のうちに力強く表現されている。わたくしはまた、1848年の『共産党宣言』の有名な一節を予示するかにみえるヘルダーリン『ヒューペリオン』における次の言葉を想起したい。「すべては各人のため、そして各人は万人のため」(Alles für jeden und jeder für alle)。

ヘーゲルの哲学は、周知のように、フォイエールバッハによって唯物論的な批判を加えられた。そしてドイツ古典哲学の豊かな内容は、マルクス主義の哲学的思惟のなかに発展的に継承された。そのことの社会的基盤には、プロレタリアートの世界史の舞台への登場がある。マルクスとエンゲルスは『ドイツ・イデオロギー』において、実践的唯物論者すなわちコミュニストにとっての哲学的歴史理論、史的唯物論をうちたてた。

わたくしは、18世紀の半ばから19世紀半ばにいたるドイツの哲学的・文学的・美学的思惟のこの偉大な発展をふりかえって、古代ギリシア的思惟がゲルマンの精神的風土のなかに、いかにみごとに生きいきと再生しているかをみることができると信じている。この再生の課題を、みずからはひたすら古代美術とその理念の高みへの溢れる憧憬と讃仰の念をもって、先駆的にになったのが、ヴィンケルマンであった。

### 3

1748年にドレスデンの近郊ネトニッツに移り、ビュナウ伯の助手をつとめるかたわら、ドレスデンの画廊に足しげく通い、コレッジオ、ティチアーノ、ティントレット、ジョルジオーネ、ヴェロネーゼらイタリア・ルネッサンスの巨匠たちの絵画に寄せる美的な断想を書きとめていたヴィンケルマンであったが、前述したように、かれは1754年にドレスデンに移って、古代美術のおびただしい作品のなかに埋もれながら、堰を切ったように、溢れる美的思想を『古代美術模倣論』のなかに表出した。もとよりかれには、のちにローマで執筆した畢生の著作『古代美術史』があるが、この処女作だけでも、かれの名は不朽なものである。ヘルダーも「ヴィンケルマンの記念」のなかでこう書いている。「ヴィンケルマンのすべての著作のなかで、この書物は、その感激的な表現と

花ひらく青春の息吹とによって、少なくともわたくしにとってはいつまでも第一のものでありつづけるだろう。……じっさいヴィンケルマンもまさしく年とともに成長した。しかし、かれの黎明、最初のおうような青春はこの処女作のうちに託されている。かれの心はなお芽生えであるが、香も花も樹も実もすべてをそのうちにつつんでいる。」

以下でわたくしは、古典的美の発見者であるとともにドイツ古典主義の時代への道を用意したフマニスト、ヴィンケルマンについて、若干の考えをしるしたい。

1 『模倣論』のなかでかれは書いている。「美術の至醇な源泉は開かれた。それを見出しそれを味うものは幸である。この源泉を探ねることは、アテネに旅することである。そしていまやドレスデンは美術家にとってアテネとなった。」「われわれにとって偉大になる、いやできれば他の模倣を許さないものとなる唯一の道は、古代人を模倣することにある。」かれによれば、模倣は創造とは矛盾するものではない。むしろ、模倣は美のカノンにしたがう創造的な活動であり、美的理念の実現であり、模倣は、奴隸的な踏襲としての模倣から区別されねばならぬ。ヴィンケルマンは、こうして、ギリシア美術で達成された最高の美を模倣することによってこそ、ドイツの独自の美術が真に花咲くことができる、と考えたのであった。

2 ラオコーン群像は、ヴィンケルマンにとって、美術の完全な規則を与えるものとみなされた。『模倣論』のなかでも、かれがラオコーン群像について述べている箇所はとくに有名である。今日では、その創作の時期についても、解釈についても、かれの見解はかなり古くなっているとはいえ、かれの描写はなお、読むものに深い感動をひきおこす。周知のように、ヴィンケルマンはギリシアの傑作に普遍的な特徴を「高貴な簡素さと静かな偉大さ」(eine edle Einfalt und eine stille Größe)という言葉で表現している。

3 ヴィンケルマンは「近世一般歴史学の講義にかんする覚書」(1754年)で、「講義には法則が前もってきまっておき、歴史記述者はこれを自分で認識しなければならない、真理より偉大なものはない」と書いている。かれがここで重視している歴史的合法性の観点は、のちに『古代美術史』における芸術

的諸様式の変遷史についての総合的な考察、いかえれば学としての美術史の構築に実るのである。井島教授も、今日の水準からみれば、かれの叙述は多くの個々の点ではこえられているにしても、「全体としての彼の古代史学が現在なお不滅の名声を維持するのは、作風発展の法則性に基く美術史の本質的理解に由るのである」と書いている（前掲書）。

ヴィンケルマンは、この覚書のなかで、モンテスキュー、ヴォルテールら上昇期ブルジョアジーのイデオログたちの思想の影響をうけながら、人間性、人格性などのカテゴリーについて思索し、ドイツの封建的な狭隘さのなかから、市民的な自由と文化の展開を期待している。

4 ヴィンケルマンは『古代美術史』のなかで、ギリシアにおいてすぐれた美術の形成された最も重要な原因は自由であったことを指揮し、美術の高度な発展が政治的自由と切りはなせない関連をもつことを主張している。それゆえ、かれの祖国において美術がみごとな高揚をとげるためには、その封建的な桎梏をうちやぶり、市民的自由を実現することが基本的な条件である、とかれは考えた。こうして、かれは、ギリシアの美術とその思想の研究に没頭しながらも、ドイツの現実に思いを馳せ、古代的精神の再生をめざし、不慮の死をとげるその日まで、確乎とした歩みをつづけたのである。ゲーテは「ヴィンケルマン論」を次の言葉で結んでいる。「人間はこの世を去ったときの姿のままて冥界をさまようのであって、アキレウスは永遠に奮闘する若者としてわれわれの記憶に残される。……ヴィンケルマンの墓からは彼の力の息吹がただよってきて、われわれを力づけ、彼が始めたことを、熱意と愛情をこめてどこまでも押し進めてゆこうという衝動をますますかきたててくれる。」

ヴィンケルマンが後世に手渡した松明は、やがてドイツ的思惟の全領域をつつむ古典主義の偉大な炉のなかで、人間的自由の理念の巨大な炎となって燃えあがったのである。

付記 本稿は、東ドイツ、ヴィンケルマン学会主催のコロキウム「古代学者と美術史家としてのヴィンケルマン」（1986年10月24～26日、マグデブルク）におけるわたくしの報告の日本語である。

# Winckelmann und die Wiederbelebung des altgriechischen Geistes

—Eine Botschaft aus Japan—

Chikatsugu Iwasaki

## 1

Dresden, die alte Stadt der Kunst, erweckt in mir, zusammen mit dem Namen Winckelmanns, stets sehnsuchtsvolle Gefühle. Von 1754 bis 1755 blieb Winckelmann in dieser Stadt mehr als 1 Jahr lang in der Erwartung auf die Reise nach Rom und vertiefte sich in die Ausarbeitung der „Gedanken über die Nachahmung der griechischen Werke in der Malerei und Bildhauerkunst“. In Erinnerung an diese Tatsache schrieb ich, als ich zur 150-Jahr-Feier der Technischen Universität Dresden eingeladen war, in der „Sächsischen Zeitung“ (16. Okt. 1978) wie folgt: „Mir ist Ihre Stadt seit meiner Jugend als Stätte der Pflege großer humanistischer Tradition—z.B. Winckelmanns—ein Begriff.“ Dies gab mir Anlaß, in die Winckelmann-Gesellschaft einzutreten.

Mitten im zweiten Weltkrieg hatte ich als Student an der juristischen Fakultät der Tokyo-Universität die Gelegenheit, eine Sondervorlesung von Prof. Kikuo Kojima, einem der damals berühmtesten Wissenschaftler auf dem Gebiete der Geschichte der europäischen Kunst in Japan, zum Thema „Geschichte der altgriechischen Kunst“ zu hören. Von ihm wurden mehrmals verehrungsvolle Worte über Winckelmann ausgesprochen. Der Ästhetiker Prof. Tsutomu Ijima veröffentlichte bereits damals eine verdienstvolle Studie „Winckelmann“ (1936), darauf folgte 1943 die Veröffentlichung der Übersetzung von „Gedanken über

die Nachahmung“ durch Daigoro Sawayanagi, Schüler von Prof. Kojima. So konnte ich schon zu dieser Zeit vom ganzen Gehalt dieser Schrift Winckelmanns Kenntnis nehmen. Im Nachwort brachte Prof. Kojima, auch die strenge Zensur berücksichtigend, seinen Protest gegen den „Sturm“ des kaiserlichen Faschismus und die Freiheit und Kultur zerstörende Tendenz der Zeit in folgenden Worten zum Ausdruck: „In unserem Land herrscht neuerdings der Negativismus bzw. die Rechthaberei, die Geisteswissenschaften, u.a. aber die Forschung der europäischen Kultur, als nutzlos abzutun (d.h. der Ultrationalismus usw.). Wer jedoch sich selbst erkennen will, muß den Anderen kennen. So müssen wir, seichte Pseudowissenschaftler ignorierend, emsig grundlegende Forschungen über die Kultur für die künftige Kultur unseres Landes fortsetzen.“

Nach der Niederlage des kaiserlichen Faschismus wurde ich wieder Student am philosophischen Bereich der literarischen Fakultät der Tokyo-Universität und beschäftigte mich intensiv mit der altgriechischen Philosophie. Im Rückblick auf die damalige Zeit schrieb ich später wie folgt: „Ich entschied mich, mit der Forschung der altgriechischen Philosophie anzufangen, gerade deshalb, weil Winckelmann, Goethe, Schiller, Hölderlin, der Philosoph Hegel sowie Romain Rolland (mit seiner kleinen Schrift „Empedokles“) mir zeigten, daß der Ursprung der europäischen Ideen und Kultur in der altgriechischen Geisteswelt besteht. So begann mein philosophisches Leben mit der Niederlage des japanischen Militarismus.“ Bald darauf berchaftigte ich mich mit der Forchung der marxistischen Philosophie. Dann übersetzte ich die Doktordissertation „Differenz der demokritischen und epikureischen Naturphilosophie“ von Karl Marx mit seinen ausführlichen Noten. Diese Übersetzung wurde in die japanische Auflage der vom Dietz-Verlag, DDR, veröffentlichten Marx-Engels-

Werke aufgenommen.

2

Noch heute spricht Winckelmann uns an als ein großer Entdecker der klassischen, idealen Schönheit, als ein unvergleichlicher Vorgänger auf dem Gebiete der Geschichte der altgriechischen Kunst und als ein hervorragender Humanist, der den Weg zum deutschen Klassizismus bahnte.

Hier möchte ich kurz erwähnen, wie wir (in Japan) das geistige Wesen des deutschen Klassizismus, besonders den Kern der klassischen deutschen Philosophie verstehen.

Die Größe der klassischen deutschen Philosophie besteht, zusammenfassend ausgedrückt, darin, daß sie den Gesichtspunkt der menschlichen Freiheit (in der Geschichte) und der Dialektik ans Licht gebracht hat. Anders ausgedrückt: sie hat den Gesichtspunkt der auf der Würde des Menschen beruhenden Vernunft (in der Einheit mit der Sinnlichkeit) und den des Humanismus in einer untrennbaren Verbindung von Weltanschauung und Wissenschaftlichkeit aufgebaut. Dabei möchte ich hier vor allem die hohe praktische Bedeutung der Idee Kants über den ewigen Frieden und der These Hegels, die Idee könne und müsse sich verwirklichen, hervorheben, angesichts der Tatsache, daß es heute unsere dringendste Aufgabe ist, nuklearen Krieg zu verhindern und alle Kernwaffen zu beseitigen.

Die auf der Würde des Menschen beruhende Idee von der Vernunft und dem Humanismus, mit anderen Worten, die Idee von der menschlichen Freiheit oder humanitas setzt sich in den Werken von Winckelmann, Lessing, Herder, Goethe, Schiller u.a. durch und wird auch mit strahlender Kraft in Mozarts „Zauberflöte“, Beethovens „Fidelio“ und vielen Symphonien zum Ausdruck gebracht. Zu erinnern



sei hier auch an folgende Worte in Hölderlins „Hyperion“, die den berühmten Satz im „Manifest der Kommunistischen Partei“ fast vorwegzunehmen scheint : „Alles für jeden und jeder für alle“.

Hegels Philosophie wurde, wie bekannt, von Feuerbach vom materialistischen Standpunkt aus kritisiert. Der reiche Gehalt der klassischen deutschen Philosophie wurde dann im philosophischen Denken des Marxismus übergangen und weiterentwickelt. Dies ermöglichte gesellschaftlich den Auftritt des Proletariats auf die Bühne der Weltgeschichte. Marx und Engels begründeten die philosophische Theorie der Geschichte, d.h. den historischen Materialismus, für den „praktischen Materialisten, d.h. Kommunisten“ in der „Deutschen Ideologie.“

Im Hinblick auf diese große Entwicklung des philosophischen, literarischen und ästhetischen Denkens von der Mitte des 18. Jahrhunderts bis zur Mitte des 19. Jahrhunderts in Deutschland kommt eindeutig zum Ausdruck, wie lebendig die altgriechische Idee im germanischen geistigen Klima zum Wiederbeleben gelangt.

Es war Winckelmann, der von voller Sehnsucht und tiefer Bewunderung für die erreichte Höhe der antiken Kunst und deren Idee erfüllt selber die Aufgabe dieser Wiederbelebung als Pionier getragen hat.

3

Winckelmann, der, nachdem er 1748 nach Nöthnitz bei Dresden umgezogen und in die Dienste des Reichsgrafen von Bünau getreten war, oft die Galerie besuchte und ästhetische Fragmente über die Gemälde von den großen Meistern der italienischen Renaissance, wie z.B. Corregio, Tiziano, Tintoretto, Giorgione, Veronese u.a. notierte, zog, wie bereits erwähnt, 1754 wieder nach Dresden um und brachte,

sich in die zahlreichen Werke der antiken Kunst vertiefend, [seine üppigen ästhetischen Gedanken in der Schrift „Gedanken über die Nachahmung“ zum Ausdruck, als wären alle Schleusen geöffnet. Zwar hinterließ er uns sein Lebenswerk „Die Geschichte der Kunst des Altertums“, das später in Rom entstand, sein Name bleibt jedoch allein schon durch das Erstlingswerk unsterblich. Auch Herder urteilt in seiner Schrift „Denkmal Johann Winckelmanns“, folgendermaßen: „Unter allen Schriften Winckelmanns wird diese an Salbung und blühendem Jugendgeist wenigstens für mich immer die erste bleiben, ... wie auch Winckelmann von Jahr zu Jahr unstreitig gewann; seine Morgenröte aber und erste duftvolle Jugendblüte liefert er im ersten Werke. Alsdenn ist seine Seele noch Keim, der alles in sich faßt, Duft, Blüte, Baum, Früchte.“

Ich möchte nun etwas näher meine Gedanken über Winckelmann darstellen, den Wiederentdecker der antiken Schönheit und Humanisten, der den Weg zur Epoche des deutschen Klassizismus bereitete.

1. In „Gedanken über die Nachahmung“ schreibt er: „Die reinsten Quellen der Kunst sind geöffnet: glücklich ist, wer sie findet und schmecket. Diese Quellen suchen, heißt nach Athen reisen; und Dresden wird nunmehr Athen für Künstler.“ „Der einzige Weg für uns, groß, ja, wenn es möglich ist, unnachahmlich zu werden, ist die Nachahmung der Alten.“ Nach ihm widerspricht die Nachahmung nicht der Schöpfung, sondern sie bedeutet vielmehr die schöpferische Tätigkeit nach dem Kanon der Schönheit, die Realisierung der ästhetischen Idee. Sie muß also vom Nachmachen als sklavischer Unterwerfung unterschieden werden. So glaubte Winckelmann, daß die eigentümliche deutsche Kunst allein durch die Nachahmung der in der griechischen Kunst erreichten höchsten Schönheit wirklich aufblühen könne.

2. Die Laokoongruppe wurde von Winckelmann als das betrachtet, was das vollkommene Gesetz der Kunst gibt. Auch in „Gedanken über die Nachahmung“ ist die Stelle besonders bekannt, wo er diese Gruppe erwähnt. Obwohl seine Auffassung heute manchmal schon ziemlich veraltet ist — in Hinsicht auf sowohl deren Entstehungsperiode als auch die Interpretation —, erregt seine Schilderung immer noch tiefe Begeisterung im Herzen der Leser. Bekanntlich faßt Winckelmann die allgemeine Wesenheit der griechischen Meisterwerke im Ausdruck „eine edle Einfalt und eine stille Größe“ zusammen.

3. Winckelmann schreibt in „Gedanken vom mündlichen Vortrag der neueren allgemeinen Geschichte“ (1754): „Dem mündlichen Vortrag sind eben die Gesetze vorgeschrieben, die der Geschichtsschreiber über sich erkennen muß und keines ist größer als Wahrheit.“ Sein Gesichtspunkt von der historischen Gesetzmäßigkeit, den er hier für wichtig hält, findet seinen Höhepunkt später in der „Geschichte der Kunst des Altertums“, nämlich in seinen synthetischen Betrachtungen über die Geschichte der Wandlungen der künstlerischen Stile, mit anderen Worten, in seinem Aufbau der Kunstgeschichte als Wissenschaft. Vom heutigen Niveau aus gesehen, ist seine Beschreibung zwar in mancher Hinsicht überschritten worden, doch „genießt seine Geschichtsschreibung des Altertums“, so schreibt Prof. Ijima, „heute noch in ihrer Ganzheit ihren unsterblichen Ruhm gerade deshalb, weil der Verfasser das Wesen der Kunstgeschichte auf der Grundlage der Gesetzmäßigkeit der Entwicklung der schöpferischen Stile begriff“ (a.a.O.).

In diesen „Gedanken“ erhofft Winckelmann, mitten in der feudalen Begrenztheit in Deutschland, unter dem Einfluß von den humanistischen Ideen der Ideologen des aufsteigenden Bürgertums wie Montesquieu, Voltaire u.a. über die Kategorien von Menschlichkeit,

Persönlichkeit usw. seine Überlegungen entfaltend, daß sich bürgerliche Freiheit und Kultur in Deutschland bald entwickeln möge.

4. In der „Geschichte der Kunst des Altertums“ weist er darauf hin, daß die Freiheit die bedeutsamste Ursache für die Entwicklung der hervorragenden Kunst in Griechenland gewesen ist, und behauptet, daß die hohe Entwicklung der Kunst mit der politischen Freiheit in untrennbarer Beziehung steht. So vertritt er die Ansicht, daß die wesentliche Bedingung für das Aufblühen der Kunst in seinem Vaterland die Zerschlagung des feudalen Jochs und die Realisierung der bürgerlichen Freiheit seien. Er vergaß, während er sich in der Forschung der griechischen Kunst und ihrer Ideen vertiefte, niemals die reale Situation in Deutschland und machte bis zum Tag seines unerwarteten tragischen Todes für die Wiederbelebung des antiken Geistes sicheren Schritt. Goethe schließt seine kleine Schrift „Winckelmann“ mit folgenden Worten: „... in der Gestalt, wie der Mensch die Erde verläßt, wandelt er unter den Schatten, und so bleibt uns Achill als ewig strebender Jüngling gegenwärtig... Von seinem Grabe her stärkt uns der Anhauch seiner Kraft und erregt in uns den lebhaftesten Drang, das, was er begonnen, mit Eifer und Liebe fort- und immer fortzusetzen.“

Die Fackel, die Winckelmann der Nachwelt aushändigte, loderte bald im großartigen Herde des alle Gebiete des damaligen Denkens in Deutschland umfassenden Klassizismus auf zur riesigen Flamme der Idee der menschlichen Freiheit.

---

Dieses Referat wurde am 25. Okt. 1986 beim Kolloquium zum Thema: Winckelmann als Archäologe und Kunsthistoriker, das von der Winckelmann-gesellschaft vom 24. bis 26. in Magdeburg, DDR veranstaltet wurde, gelesen.